余白の美

酒井田柿右衛門

十四代酒井田柿右衛門
Sakaida Kakiemon XIV

a pilot of wisdom

集英社新書
0267
F

十四代 酒井田柿右衛門
（じゅうよんだい さかいだ かきえもん）

一九三四年佐賀県有田町生まれ。多摩美術大学日本画科卒業。一九七一年、日本工芸会正会員となる。一九八二年十四代柿右衛門を襲名。二〇〇一年重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定される。二〇〇二年、日本工芸会常任理事に就任。

余白の美 酒井田柿右衛門

集英社新書〇二六七F

二〇〇四年一一月二二日 第一刷発行

著者……十四代 酒井田柿右衛門

発行者……谷山尚義

発行所……株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二-五-一〇 郵便番号一〇一-八〇五〇

電話 〇三-三二三〇-六三九一（編集部）

〇三-三二三〇-六三九三（販売部）

〇三-三二三〇-六〇八〇（制作部）

装幀……原 研哉

印刷所……凸版印刷株式会社

製本所……加藤製本株式会社

定価はカバーに表示してあります。

© Sakaida Kakiemon XIV 2004

ISBN 4-08-720267-4 C0272

造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社制作部宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。なお、本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

Printed in Japan

a pilot of wisdom

余白の美　酒井田柿右衛門

十四代酒井田柿右衛門

Sakaida Kakiemon XIV

a pilot of wisdom

江苏工业学院图书馆
藏书章

目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

I わたし

職人気質というものは・十二代と十三代・三代で一人前
余白の美・不純物にこそある役割・十二代から私へ
塩分は怖い・化学は自然に及ばない・絵具だけはやっとけ
赤は塩をふく・「陶工柿右衛門」の家・曲川国民学校のころ
工場が遊び場・母の里・久原の思い出
有田での遊び・戦争の記憶・伊万里高校時代
「べんじゃら」の思い出・陸上とデッサン・おじさん大学生と
学生仲間と教授陣・デッサン三昧・下町で過ごした学生時代
「あそか病院」のこと・外米と納豆と味噌汁と・家出体験
修業時代・豪傑・大麻勇次先生・結婚のいきさつ
十二代逝く・十三代の浄瑠璃好き・病知らずだったのに
十四代襲名と消名供養・先代からの「贈り物」・伝承と伝統
伝統を繋ぐ・飯碗に還る・窯元の親父として
職人を育てるという仕事・柿右衛門流の物差しで …… 11

II

つくる

有田のやきもの・石を砕く・泉山の石・魔性、天草の石
濁手の素地・石は生きもの・土を作る工程・やきものの美の核心・土の熟成
マイセンには無い「矛盾」の感覚・職人の手はごまかせない・蹴ロクロこそ
ロクロの仕事と「型打ち」・乾き具合、「水拭き」・素焼きの意味・下絵付け・濃み
柞灰を使う・切り合わせ・濁手の上釉は薄く薄く・本焼き窯・窯詰めと窯焚きの仕事
「焙り焚き」「ねらし焚き」「攻め焚き」・窯焼きは世話焼き・耐火煉瓦と窯・あげてみ
薪の話・採算を度外視して・良い傷と駄目な傷・炎の為せる業・柿右衛門の「白」
赤絵のはじまり・上絵具調合法・むかしの絵の良さ・線描きのこと・一本筋を通す
絵にしてはいけない・職人の癖・「一人前だ!」と思う〝病気〟・筆いろいろ
もの作り半分、職人作り半分・食文化の中のやきもの・赤絵窯・手間ひまのかかる仕事

III

あじわう

柿右衛門窯とその様式・様式の特徴

色絵 牡丹菊文 蓋付 壺・色絵 梅牡丹柘榴龍文 菊形鉢

残された土型・色絵 芙蓉手草花文 皿

染錦 花籠文 皿〈ヘソ皿〉・色絵 花鳥文 面取 壺

色絵 岩菊文 兎形つまみ 蓋物・色絵 獅子 置物〈一対〉

色絵 松竹梅鳥文 輪花皿・色絵 花鳥文 皿

色絵 岩菊牡丹鳥文 壺・色絵 葡萄文 婦人立像

松竹梅鳥文 輪花皿〈マイセン窯〉・柿右衛門様式 倣製 金具付 壺〈シャンティ窯〉

色絵 苺花地文 花瓶〈マイセン製陶所との共同制作〉・染錦 唐草龍鳳凰文 花瓶〈十一代作〉

濁手 草花文 八角深鉢〈十二代作〉・濁手 椿文 花瓶〈十三代作〉

濁手 蓼文 鉢〈十三代作〉・色絵 魚草文 大鉢〈酒井田正作〉

濁手 桜文 花瓶〈十四代作〉

濁手に銘を入れない本当の理由——あとがきにかえて……236
年表……243
参考文献……253

本文デザイン　鈴木一誌＋武井貴行

柿右衛門窯の全容（撮影・野村佐紀子）

此为试读，需要完整PDF请访问： www.ertong

柿右衛門家の枝垂れ桜の前で
（撮影・野村佐紀子）

I

わたし

（撮影・野村佐紀子）

十二代酒井田柿右衛門(正次)

十三代酒井田柿右衛門(渋雄)

十二代の妻・スミ

十三代柿右衛門と妻・ツネ

職人気質というものは

煙草ばっかり吸うようになって……。いま、煙管の掃除をしてたんですよ。ヤニがいっぱい付いてて。工場の職人っていうのは、だいたいみんな煙管なんですね。大工とかなんとか、みんなそうですね。

刻み（煙草）です。いまもあるんですよ、一種類だけ。

工場の中は禁煙だと思われてるんでちょっと困るんですけど、煙管っていいますか、煙草がないと呼吸が合わんのですよ（笑）。私はなんとかなりますけど、煙草を吸う職人がいっぱいおりますもんですから。工場の外でって言いますけど、それもちょっと困ったことで、どうすればいいのかいろいろ考えているところです。

仕事場っていうところは、職人さんにとっては煙草を吸う、煙管を掃除する、そういう場所なんです。それもひとつ仕事のうちですからねぇ。でも、煙管掃除なんて、いまはもう出来る人がいなくなりました。面倒臭いものですから。細い針金をくるくると巻いて節目を作って、それを管（羅宇）の中に入れたり出したり、通してやると早いんですよ。しょっちゅうやってますから適当でいいんです。でも、煙管に付いてるヤニを見たら真っ黒で、ここにこういう汚いのが入っているのかと思うとねー（笑）。

針金を使わないで紙縒りを作って掃除する人もいますね。「紙縒りって何ですか？」って言

うのがいるような時代になりました。「馬鹿なこと言うな！」って（笑）言っても仕方がないですけど。もう紙縒りを縒れる人もいなくなったんじゃないでしょうか？

　歌舞伎の片岡家と私どもは、ずっと親しくさせてもらっています。孝夫君が平成十年（一九九八年）に第十五代仁左衛門を襲名しましたが、大正元年（一九一二年）に初演された『名工柿右衛門』[1]を十一代が演じられたこともあって、いろいろご縁があってですね。それで、孝夫君が襲名したときの舞台で煙管を使う場面があったんですよ。『助六』かなんかだったと思うんですが、その煙管を使う場面がなんとも不自然でしてねぇ（笑）。

　孝夫君にそう言ったら、「もっと先輩に習わんといかんですね」と言って笑ってましたけど。あるんですよ、呼吸というものが。煙管に煙草の葉を詰めて、詰めた葉に火を点けるという動作というか、流れの中の呼吸っていうのか、間というのか、なんとも言えん流れがですね。いま、急にそんなことを思い出しました。

　少し吸ってまだ火が点いている葉の塊を掌の中に落とし、そのときまでに指先に摘んでおいた次の葉を煙管の口に詰めて、それで掌の中の火を煙管の口に新しく入れた葉に移すんです、……こうやって。火と一緒に残ったやつを半分吸ってしまって、灰になったらポンと掌に落とす。それで、また新しいのを詰めて吸い、それが半分ぐらいになるとまたポンと掌に出す。

　そういう仕草というものは一目見ればもう分かるんです、慣れているかどうか。煙管の首のところを火鉢なんかにポンと当てて火を落とすというような日常のこと、無意識にやっている

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo